

Title	<紹介>大橋毅彦・趙夢雲・竹松良明・山崎眞紀子・木田隆文 編著・注釈『上海1944-1945 武田泰淳『上海の螢』注釈』
Author(s)	鈴木, 暁世
Citation	語文. 2008, 91, p. 102-102
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/69128">https://hdl.handle.net/11094/69128</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大橋毅彦・趙夢雲・竹松良明・山崎眞紀子・松本陽子・  
木田隆文 編著・注釈『上海 1944-1945 武田泰淳』上  
海の螢』注釈』

鈴木 曉 世

本書は、武田泰淳『上海の螢』（「海」一九六七年二月九日）を  
詳細な注釈と共に読むことよって日本近代における上海体験を  
再考しようというもので、編著メンバーによる三年越しの共同研  
究の成果である。作品の舞台は一九四四年夏から四五年六月頃ま  
であるが、泰淳も中日文化協会職員として一九四四年六月から  
四六年二月まで上海に滞在しており、本作品は「戦時下上海にお  
ける日本の文化活動を確認する好個の事例であるとともに、小説  
家武田泰淳の〈中国体験〉を総括する作品（木田隆文氏）である。  
とりわけ興味深いのが、石上玄一郎、阿部知二、田村俊子、堀  
田善衛ら同時期に上海に居住していた日本人作家たちや陶晶孫ら  
中国の文化人らの活動、メディアや風俗などが作品中に数多く描  
き込まれている点である。中日文化協会をモデルとする「東方文  
化協会」に勤める「私」を主人公としているため、中国人、日本  
人、白系ロシア人、ユダヤ人らによる文学・演劇・音楽など多岐  
にわたる活動模様や交渉／摩擦のあり様、背景となっている日本  
の対中国文化政策が浮かび上がってくるのである。

大東亜文学者会議の場面での「和平側の中国人たちの胸のうち

（中略）決定的な瞬間。それは、やってくるだろう」という表現  
について、竹松良明氏は「遠からぬ日本の敗戦とそれに伴う漢奸  
肅清を指す事はほぼ確か」と分析し、日本側の出席者である高見  
順や長与善郎、「闇のグループ」藍衣社への注釈と合わせて作品  
背景について鋭く踏み込んでいる。また、「雑種」〈混血〉とい  
うモチーフについて、大橋毅彦氏は「人間の相互関係の中に亀  
裂・分断・差別を持ち込むイデオロギーの暴力性を映し出す鏡と  
もなれば、そうした体制に向けて投じられる一個の爆裂弾ともな  
る」とし、他作品にも同様のモチーフが出てくることを指摘して  
いる。

松本陽子氏は、上海到着の日に「私」、或いは泰淳にとつての  
象徴的な〈中国〉像、憧憬の投影」（松本氏）として登場した美  
しい螢が、作品後半においては夏女士の屍体を食べ尽す「奇怪な  
夢」となって再登場することに着目する。この場面での螢は、  
「自身の置かれた状況に無自覚な夏女士（漢奸）と、個々は微小  
でありながら意欲的・意志的な螢（中国人群集）との対比」を鮮  
やかに描き出しているのである。

政治的背景や歴史的事実、モデルとなった人物にまで及ぶ資料  
の精査と共に、泰淳の他作品も再読されていく。注釈の積み重ね  
が、作品の読解をより豊かにしていくという魅力にこそ、本書の  
積極的な意義があると言えるだろう。

（双文社出版、二〇〇八年六月刊、一六〇頁、五、六〇〇円）

（すずき・あきよ 本学大学院助教）